

## 第 33 回日本受精着床学会（東京）

### がん患者の凍結配偶子の使用状況と看護支援の考察

田中敦子、野中幸子、弘瀬美歩、明後佳代子、上島知子、佐藤紀江、大野雅代、杉浦美里  
奥田剛、竹内巧、京野廣一  
京野アートクリニック高輪

【目的】がん患者の挙児希望を見据えた治療法に妊孕性温存がある。がんを克服したサバイバー達の凍結配偶子の使用状況と、実際に使用した 3 症例の経過を振り返り、看護支援を後方視的に検討した。

【方法】2012 年 10 月 1 日から 2015 年 3 月 31 日までに、妊孕性温存目的で来院し配偶子凍結を実施した 13 例と、多施設より凍結配偶子を搬入した 3 例を対象とした。

【結果および症例紹介】使用率：18.7% (3 例/16 例)、死亡の連絡：なし、更新手続きなし：1 例、配偶子凍結（13 例）の内訳：精子凍結 4 例/平均 4.5 本、卵子凍結 5 例/平均 4.2 個、胚凍結 4 例/平均 3.5 個

症例 1：40 代夫婦。夫、精巣腫瘍にて精子凍結を実施。海外から搬入。治療転帰：採卵 3 回目胚盤胞 1 個凍結し、凍結融解胚移植で妊娠成立。現在、夫は無精子症。「採れる卵が少ないし、精子も限りがあるし、移植まで辿りつけなくて不安で焦っている。あとは私が頑張るしかない」

症例 2：20 代夫婦。妻 25 歳時（未婚）、慢性骨髄性白血病の急性転化にて臍帯血移植を実施。移植前に卵子凍結（1 個）実施。治療転帰：搬入後、凍結卵子融解 ICSI を行ったが、受精せず。「もう子供は産めない。辛いがん治療を頑張ったので、今度は良いことがあると思っていたのに」

症例 3：30 代夫婦。夫、悪性リンパ腫にて精子凍結を実施。第 1 子を凍結精子 ICSI で授かり、第 2 子希望で他院より搬入。治療転帰：採卵初回、全胚凍結（胚盤胞 1 個）し、凍結融解胚移植で妊娠成立。「まだ精子はあるが、経済的理由で治療は最後になる。どうかくっつけて下さい。お願いします」

【考察】凍結配偶子を用いて ART を実施したカップルは、限りある精子やワンチャンスしかない不安等、女性が強いプレッシャーを感じているのが特徴的だった。がん生殖における看護支援は、強いストレスや不安を抱えている相手をよく理解し、話を傾聴し医療情報の提供や、時には支持や慰めを与える看護カウンセリングが重要であると再確認した。